北海道立正学園　旭川実業高等学校

『創立者を偲(しの)ぶ日』にあたって

創立者 **堀　水　孝(こう)　教(きょう)　先生** の生涯

☆　堀　水　孝　教　先　生

明治３３年（西暦１９００年）１１月７日、山梨県南巨摩郡身延町に生まれる。
山梨師範学校、立正大学専門部高等師範科等に学び、本州での教員生活を経て、昭和１５年渡道。旭川市立中学校（現・旭川北高校）の創立に伴い教員として赴任。以後教員としての生涯を全うする。

・　昭和２２年に旭川市立女子商業学校長となり、歌志内高等学校長、増毛高等学校長、津別高等学校長を歴任し、５９歳で退職。

・　公立高校での教師生活を通じて、公立学校での教育の限界を感じた先生は、多くの同志の要請を請け、自分の理想とする教育、様々な規制にとらわれずに一人ひとりの生徒の個性・能力を十分に引き出すための思い切った実践のできる教育の実現を目指して私立高校の設立を決意し、準備を開始。

・　特に財産もない一公立学校退職校長が、新たに一つの高校をつくることの困難さは、現在高等学校を作るとしたらどれくらいのお金がかかるか、ということを考えてみただけでも容易に想像できるであろう。

・　高等学校創立には当時のお金で最低５千万円を必要とした（当時の大学卒業者の初任給は７千円程度で、現在の約３０分の１）が、当然全財産を投げうっても到底足りるものではなく、その殆どは借金に頼らざるを得なかった。金策に奔走したが、どうしても３千万円が不足し、思い余って母校の立正大学を尋ねて借金を申し込む。

・　当時の立正大学学長・石橋湛山先生（後の内閣総理大臣）は、「成功して母校に寄付を申し出る卒業生は多いが、借金の申し込みに来た卒業生は君が初めてだ」と呆れながらも、その意気と理想に共鳴し、出資を約束してくださる。

・　こうした苦難の船出ではあったが先生の理想は大きかった。僅か入学生１６０名でのスタートであるにもかかわらず、将来の発展を信じて現在の広大な校地を購入（これも借金）。ただちに現在の本館校舎と第一体育館の建設に着手した。この時、先生は満６０歳。普通なら悠々自適の余生を楽しむ年代であった。

☆☆☆